

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第二十三回）

つくしくわんぜおんじ

# 「筑紫観世音寺」

～筑紫の綿歌～

古代、大宰府は九州九国三島の総督府として、外交・内政・軍事の三権を司つかさどっていた。

・この大宰府政庁跡（福岡県太宰府市坂本）真東約600mの地に「観世音寺（福岡県太宰府市観世音寺町）」が楠の巨木に囲まれ静寂の中にたたずんでいる。「観世音寺」は中大兄皇子なかのおおえのおうじ（後の天智天皇）が母帝・齐明天皇さいめいの菩提ぼだいをとむらうために発願ほつがんし建立こんりゅうされた古刹こしゃつであり、奈良時代には「府大寺ふだいじ」と称された寺院で創建時の建物のほとんどは失ったが現在も法灯ほうとうをかかげ続けている。

・齐明天皇は、唐・新羅連合軍しんらに滅ぼされた百濟くだらを助けるため自ら軍を率い皇太子の中大兄皇子や大海人皇子おおあまのおうじ（後の天武天皇）など当時の朝廷の中枢などを伴って戦争の指揮をとるために難波なにわの港から海路筑紫にむかった。

・この時のことを日本書紀には「齐明七（661）年正月六日に御船は征西せいせいに出発」とあり、齐明天皇一行は難波を出港したことがわかる。

その後、四国伊予熟田津にきたつの石湯行宮いわゆのかりみや（道後温泉・推定）に寄り、同年三月二十五日に九州・娜大津なのおおつ（現・博多港）に着く。女帝は唐・新羅連合軍との戦いに備えて、本陣を娜大津の海岸から南へ約40キロ内陸部へ入った筑後の朝倉あさぐらの橘たちばなのひろにわのみや（現・福岡県朝倉市）に遷し、戦いに備えたが、齐明天皇は九州に上陸4カ月後の同年七月二十四日に、この朝倉宮で崩御されたと記されている。

・観世音寺は齐明七（661）年に崩御された齐明天皇の冥福を祈つて、子の中大兄皇子が発願したが、寺の完成は遅れ80数年を経た天平十八年（746）年になったことが「続日本記」などに記される。

・観世音寺の完成が遅れた原因として岡本顕實著「大宰府」には大宰府の造営、壬申の乱、平城遷都などと国政は多事多難で、さらに観世音寺の規模が中央の諸大寺にも劣らない壮大な七堂伽藍しちどうがらんを配したものであったためだろうと述べている。

・観世音寺の造営が非常に遅れていたことから養老七（723）年になって美濃の国守として治績をあげていたことなどから当時、太上天皇（元明）の病氣回復を祈るために、出家していた沙弥満誓さみまんせいを観世音寺の別当べつたう（造営の長官）として招き寺の造営に当らせるなどしてようやく天平十八年（746）年に大宰府政庁の東に接して建立された。

・筑紫に創建された観世音寺の別当（造営の長官）として力を尽くし

た沙弥満誓の綿を詠む歌一首が万葉集におさめられている。

つくし わた

しらぬひ 筑紫の綿は

き

身に付けて いまだは着ねど

あたた

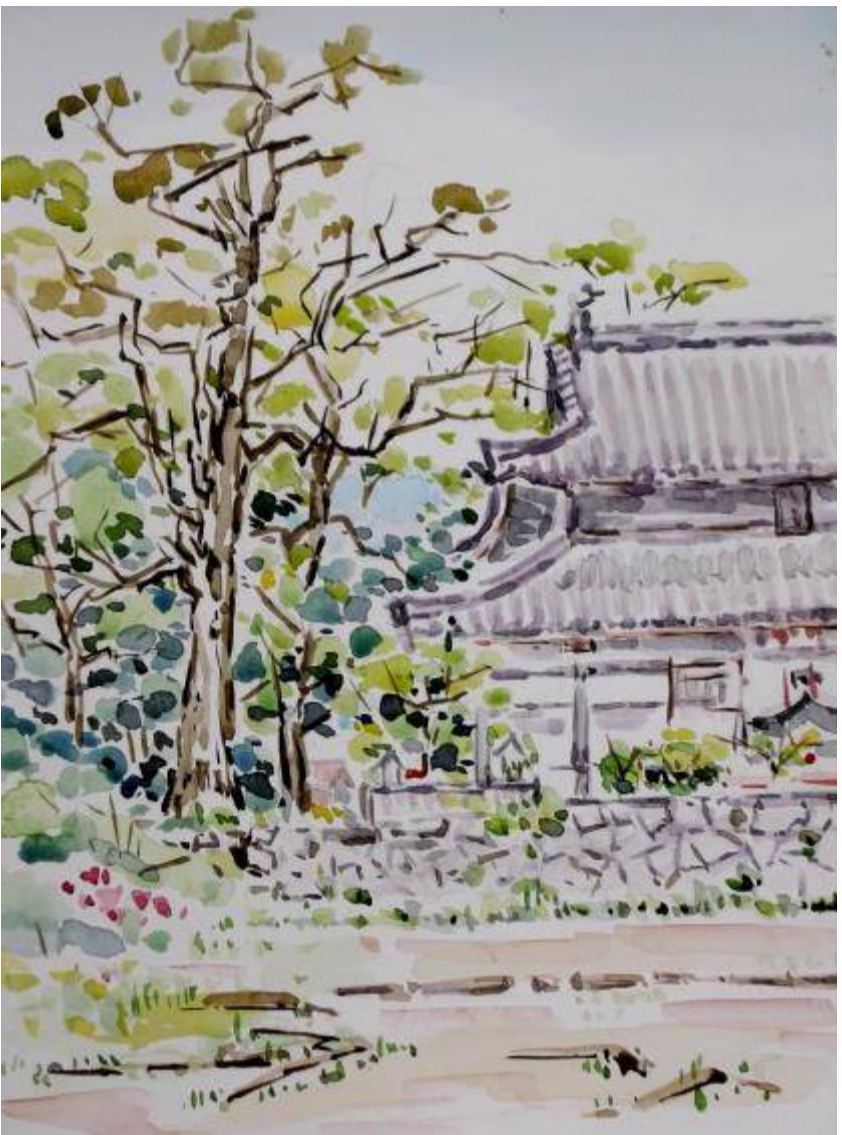
暖けく見ゆ

卷三―三三六 作者 沙弥満誓

（解説）歌の意は「筑紫特産の真綿は、まだ肌身に着てみたことはないが、いかにも暖かそうだ。」この歌は筑紫の人々への愛着を暖かな綿に託したのではなからうか。との説がある。

・当時、筑紫から都に多くの暖かな綿が送られていた。真綿が、古代筑紫の名産であったことは「続日本紀」や平城京出土の木簡からも知られている。

(写生地1) — 観世音寺の正門、南大門跡から約30mほど北に入った中門跡とされている場所から重厚なたたずまいの本堂(講堂)を描く。創建時の本堂は、暴雨風、大火などで何回か大破・焼失した。現在の建物は元禄元(1688)年に再建された。(杏 花)



◎「戒壇院」かいだんいん — 観世音寺が完成してから15年後の天平宝字五(76

1)年に「天下の三戒壇」の一つとして観世音寺に付属して区域内に建立された。三戒壇院とは奈良の東大寺、下野しもつけ(今の栃木県)の薬師寺と、この筑紫の観世音寺の戒壇院を云う。なお、下野薬師寺は東戒壇、筑紫観世音寺は西戒壇と称された。戒壇院は奈良時代において出

家者を正式な僧尼とするために必要な戒律かいりつを授けるために設置された施設で、観世音寺は戒壇院を設けたことにより九州の僧尼たちに戒律をさずけることができる唯一の寺院として栄え名実ともに「府大寺」となった。なお、戒壇院は江戸時代に独立して別の寺院となった。

(写生地2) 「戒壇院」 — 戒壇院正門 「南門」 前から戒壇院の全景と背後に万葉集に詠われる大野山(現・四王寺山)を描く。(杏花)



・西鉄天神大牟田線「都府楼前駅」下車、「県道筑紫野大宰府線」を東へ徒歩約15分で「大宰府政庁跡」さらに5分ほど歩くと「戒壇院(太宰府市観世音町)」と、隣接した「観世音寺(同)」に至る。

(参考文献) 「史跡観世音寺」・「目でみる大宰府」福田良輔著「九州の万葉」等